

絵本作家Dr. Seussが与える教訓と警告

英語英文学科2年 山崎あい

はじめての教科書

小さい頃は多くの人々が両親や幼稚園、保育園の先生から絵本を読んでもらった記憶があると思う。しかし、あなたはその中の何冊の物語を覚えているだろう。そして、その物語がどのような教訓を与えていたか、覚えているだろうか。私は、覚えているお話はあってもそれがどのような教訓があったかなど覚えていない。(むしろそのお話を聞いた時点で教訓など理解してはいないだろう)だが、年を重ねてから絵本を読んでもみるとストーリーだけを楽しむのではなくその本の深さやそこからわかる作者の心理を探るようになる。つまり、絵本という初めての媒体が教科書となり得るのにはある程度の期間を必要とすることがわかる。よってその教訓の重要性を知るのもある程度後の事となる。絵本作家はその小さな媒体の中で教訓以外のもっと

重要なことを訴えているというのに。

有効期限

歴史は変わらざとも、憶測故に発生した間違った歴史は訂正され、教科書の内容は変わってしまう。つまり、教科書には有効期限がある。しかし、絵本には有効期限というものがない。もちろん個人の考えが存在するのだから、それを相手に押し付けるといってもいいので、わざわざ作者の気持ちや考え方が変わったとしても訂正されることはない。よって私は、日々変わっていく内容が記載されたそのような何が正しくて、何が正しくないかというような曖昧な意見を並びたてた教科書よりも多くの人々の考えが詰まった絵本の方がよっぽど価値があると思う。

無期限の警告

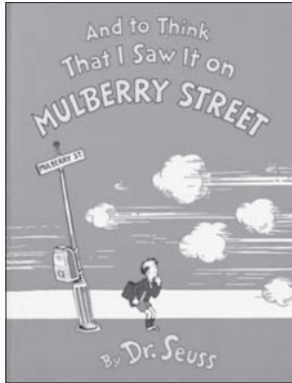
有効期限のない本の中でも内容はさまざまである。その教訓は人間関係を円滑に行うための手立てだとか、物事の善悪の見極め方など。このような教訓を得た人々は、少なからずある程度大人になってもその教訓は覚えているだろう。しかし、環境問題ではどうだろう。環境の話を書いた絵本を読んでいると、同じ世界で起こっている問題であっても、それを絵本を通してしまおうとその絵本という世界で起こっている大変な事件だという認識が強くなってしまいい、これらは他人ごとにしてしまいがちである。しかし、探せば探すほどにそのようなことをテーマにした絵本は星の数ほど存在する。それらの作品には、今よりもっと地球が悪い状況にならないことを祈る作者とこのまま放っておくと大変なことになってしまうという次世代

へ向けた警告、そしてそれをどうか防いでほしいというSOSが込められているのである。

Dr.Seuss The Lorax

私が最近出会った本の中で一番感銘を受けた本がある。

皆さんは、Dr. Seussという人物をご存知だろうか。本名はTheodor Seuss Geisel/シオドア・スース・ガイゼル。元々絵本作家でない彼は1904年マサチューセッツ州スプリングフィールドに生まれ、1925年にダートマス・カレッジ卒業後、オックスフォード大学にて文学の博士号取得。その後はアメリカの雑誌『Judge』に漫画やユーモラスな記事を掲載していた。1936年ヨーロッパ旅行の途中の舟のエンジンのリズムを聞いて、一作目の絵本『And to Think That I Saw It on Mulberry Street』に漫画やユーモラスな記事を掲載していた。

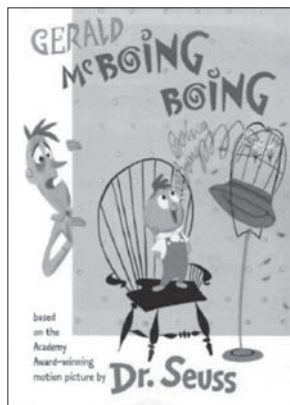


『And to Think That I Saw It on Mulberry Street』(1936)

『Street』を思いつき、それは大きな成功をおさめた。

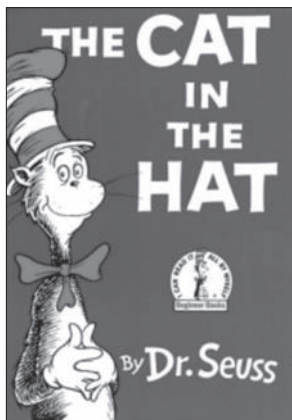
第二次大戦中に軍隊に入ったガイゼルはハリウッドに送られ、そこでドキュメンタリー作品『Hitler Lives』『Design for Death』を製作。

アニメーションの製作も行い『Gerald McBoing-Boing』はオスカーに輝いている。



『Gerald McBoing-Boing』(1950)

1954年に雑誌『He』に、学校での読みに書きについて問題があるのは、彼らが読んでい本がつまらないからだと主張。また今日のり



『The Cat in the Hat』(1957)

ードーズの走りとして、重要単語220語に絞って作られた『The Cat in the Hat』(2003年にはタイトルを日本語で『ハットしてキャット』と訳され映画化もされている)が出版された。

そして1991年9月24日永眠。私が感銘を受けた本はそんな彼の書いた『The LORAX』(森のローラックス)という話である。(2010年の4月のアースデーに現在のアメリカ国内でこの本をテーマに行われたイベント『ローラックスプログラム』というものが実際あったようだ。)これは、環境問題をテーマにした本でまず荒れ果てた土地に人間の男の子がひとり足で踏み入れるところから始まる。男の子は全身毛むくじゃらで本編では首から下しか出てこないワンズラーというキャラクター(現代人の象徴)にこの土地が荒れ果ててしまった理由を聞く。ワンズラーはもともと旅の商人でスニーズという様々なものの原料となる木の葉を求めて森にやってきて、動物たちのことなどお構いなしで次々と木を切り倒していく。その木のなかの一本から出てきたのが我々に教訓と警告を与えてくれるローラックスである。彼は、小さいながら一人の力でワンズラーを必死に説

得しようとするが聞き耳を持たないワンスラーは最終的にその土地に対しても自分に対しても最悪の結果しか残せずに、ローラックスはついにその森を旅立ってしまふ。この物語のラストでワンスラーが次世代への希望である男の子に一粒の木の实を渡すのだが、このエンディングが私はとても気に入った。ワンスラーは少年にあえて自分の意見は述べずに今後（木の实）のことを委ねるのである。今後を決めるのは自分たち自身なのだからと言わんばかりに。最後はこうこうしなければならぬという終りでないのが読者にどうすべきか考えてほしいという作者の考えが伝わってきて大変良い作品だと私は感じた。そしてもう一つ、私がこのエンディングに強く惹かれた理由がある。仮に、この物語でワンスラーが少年に「今後は君がどうにかしてくれ」と言つて幕を閉じるとしよう。となると、あまりにも無責任で味気ない終わり方に感じないだろうか。このエンディングには作者の次世代への思い（自分のした過ちを悔み、少しでも改善に向かわせようという思い）がワンスラーの少年に木の实を委ねるといふ行為を通して表わされているように思える。そして、この本を読み終えた時私は、今自分たちがしていることを今一度考えなおすべきなのではないかと

感じた。ワンスラーのような後悔を次世代に語り継いではいけないと。ちなみに言えばこの本が書かれたのは1970年代。40年たった今でもまだ環境問題は世間に騒がれている。



『The LORAX』 (1971)

最後に

前にも言ったように絵本には有効期限がない。しかし、この問題に関しては、私たちが期限をつけなくてはならない。それが前の世代の作者たちの想いなのならばなおさらのこと。このまま次の世代へと引き継いではならない問題も絵本の中に存在するということを私たちは覚えていなければならない。教訓は自分たちを向上させてゆくものではなく二度と繰り返してはいけない世界も変えてくれる教訓もあるのだと。

<http://origin-www.seussville.com/loraxproject/>

<http://www.wired.com/geekdad/2009/05/the-cat-in-the-hat-knows-a-lot-about-that/>

http://www.goodreads.com/book/show/7784.The_Lorax

<http://www.inspire4less.com/christian/gerald-mcboing-boing-dr-seuss/9780679891406/product-details?PID=21726>

<http://www.flickr.com/photos/cctwebteam/3303538591/>